

自分にできることを

マルコの福音書 14章 3-9節

はじめに

私たちの教会では、毎月テーマを決めています。そして月の第一週の礼拝の説教では、その月のテーマに従ってお話することになっています。3月のテーマは、「奉仕」です。

今日の聖書箇所には、ある女の人がイエス様の頭に非常に高価なナルド油を注いだという出来事が書かれています。今日は、この女性の姿から、私たちの「奉仕」のあり方を学びたいと思います。

1. ある女の人のしたこと

イエス様は十字架で死なれる数日前、「ベタニア」という町の「ツアラアトに冒された人シモン」という人の家で食事をしていました。「ベタニア」という町は、エルサレムに近い町で、イエス様は最後の一週間、昼間はエルサレムで活動し、夕方になると「ベタニア」に帰って来て、寝泊まりしていたようです。この「ツアラアトに冒された人シモン」という人は、この聖書箇所にはしか出て来ないので、どういう人か分かりません。おそらくイエス様によって、ツアラアトという皮膚病を癒されて、その感謝の思いから自分の家をイエス様や弟子たちに開放していたのだと思います。

イエス様がこのシモンの家で食事していると、ある女の人が入って来て、純粋で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を割って、イエス様の頭に注ぎ始めたというのです。

この出来事は、四つの福音書に書かれています。それぞれ少しずつ内容は違いますが、女性がイエス様に香油を注いだという出来事は、四つの福音書すべてに書かれています。その意味で、この出来事は非常に重要な出来事だと言えます。そしてイエス様ご自身も、今日の聖書箇所の9節で、「**まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます**」と言われています。

大切なのは、この女性が誰であるかではなくて、この女性が「したこと」が、覚えられなければならないということです。それは、世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、必ず覚えられなければならないのです。この女性の「名前」が覚えられるのではなく、この女性が「したこと」が覚えられ、国や時代を超えて、イエス様を信じるすべてのクリスチャンが、彼女の「したこと」から学ぶ必要があるのです。

2. 何人かの者の憤慨

しかし彼女の「したこと」を、シモンの家で目の前で見た人たちは、怒って彼女を厳し

く責めたというのです。4-5 節にはこうあります。「**何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。**」

彼女の「したこと」を目の前で見た人たちは、彼女の「したこと」はあまりにも「無駄」なことに見えて、怒ったのです。なぜなら彼女が、イエス様の頭に注いだ「ナルド油」には、三百デナリ以上の価値があったからです。「ナルド油」というのはインドで作られて輸入された香油であったので、非常に高価なものであったようです。一デナリが当時の人々の一日分の給料でした。ですから、三百デナリは、当時の人々の三百日分の給料にあたるのです。当時の人々の約一年分の給料です。今の私たちが考えると、仮に労働者の一日分の給料が一万円だとすると、三百デナリは三百万円の価値があるということになります。

彼女は、当時の人々の約一年分の給料、また三百万円以上の香油を、イエス様の頭に一気に注いで、一瞬で使い切ってしまったのです。その彼女の姿を見た人々は、「もったいない、無駄遣いだ」と思えて、彼女を責めたのです。そして、そんな使い方ではなくて、お金に替えて貧しい人たちに施しをした方が、有効な使い方だと考えたのです。つまり、イエス様の頭に三百万円の香油を注ぐより、貧しい人たちに三百万円の施しをした方が賢い使い方だと言うのです。そして彼女の使い方は、愚かな使い方だと責め立てたのです。

3. イエスのことば

では、イエス様は彼女の「したこと」について何と言われるのでしょうか。イエス様は、6-8 節でこのように言われました。「**彼女を、するまますべておきなさい。なぜ困らせるのですか。わたしのために、良いことをしてくれたのです。貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望むとき、いつでも彼らに良いことをしてあげられます。しかし、わたしは、いつもあなたがたと一緒にいるわけではありません。彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。**」

イエス様は、彼女の「したこと」を、「良いこと」として受け取られました。そして彼女は、イエス様の埋葬に備えて、前もって香油を塗ってくれたのだと言われました。つまり彼女は、イエス様の十字架の死に備えて、香油を塗ったのだと言われるのです。

今日の聖書箇所には、彼女の言葉は何一つ書かれていません。ですから彼女が「何のために」、イエス様の頭に高価な香油を注いだのかは分かりません。しかしイエス様は、「彼女は、わたしの十字架の死に備えて香油を注いでくれたのだ」と言われるのです。

しかし多くの聖書の学者たちは、この時、彼女は本当にイエス様の十字架の死に備えて香油を注いだのだろうかという疑問を投げかけています。そしてむしろ彼女は、何も考えずに、ただイエス様への愛に溢れて、「自分にできる」精一杯のことをしただけではないかと言うのです。彼女は、今自分の持っている物で最高のものは、三百デナリの「ナルド油」しかない、とにかく愛するイエス様に精一杯の物をささげたい、ただそういう素朴な思いだけだったのではないかと言うのです。彼女は、十字架の死の備えということまで

考えてはいないで、何も考えずに、ただイエス様への愛を率直に、大胆に表しただけだったのではないかと言うのです。そして、その彼女の思いと愛に応えて、イエス様が彼女の「したこと」を、自分の十字架の死の備えという意味を与えて、受け取られたのではないかと言うのです。

彼女の「したこと」は、イエス様への愛の表現だったと思います。私たちがこの出来事から教えられることの一つは、イエス様は、イエス様への愛を込めた私たちの「行い」や「奉仕」や「ささげ物」を、決して「無駄なこと」とは思われたいということではないでしょうか。たとえ周りの人から見れば、「無駄なこと」のように見えることでも、そこにイエス様への愛が込められているなら、イエス様は「良いこと」として受け取ってくださり、その「行い」や「奉仕」や「ささげ物」に意味を与えてくれるのです。もちろん、私たちの「教会の活動」や「奉仕」や「ささげ物」は、効果的であることや合理的であることは大切なことです。労力や時間や献金をいらずに浪費することは避けなければなりません。しかしそうであっても、教会における「活動」や「奉仕」や「献金」にとって最も大切なことは、それらにイエス様への愛がしっかりと込められているかどうかということではないでしょうか。イエス様への愛が込められた教会の「活動」や「奉仕」や「献金」には、無駄なことは一つもないのです。そこにイエス様への愛が込められているなら、イエス様がそれらに必ず意味を与えてくださるのです。

彼女の「したこと」は、「イエス様の頭に油を注いだこと」でした。「キリスト」という言葉は、「メシア」「救い主」のことで、「油注がれた者」という意味です。旧約時代において、預言者や祭司や王は、任職される時に油を注がれました。この油は、聖霊を象徴していました。そして旧約時代の人々は、預言者・祭司・王の職務を兼ね揃え、聖霊を豊かに注がれた「キリスト」という救い主を待ち望んでいたのです。

四つの福音書がなぜ彼女の「したこと」を書き記し、イエス様がなぜ彼女の「したこと」は世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では覚えられなければならないと言われたのか、それは彼女の「したこと」は、イエス様こそ、油注がれた「キリスト」である、「救い主」であるということをも最も豊かに表していたからです。私たちは、彼女の「したこと」を覚えるたびに、イエス様こそ、確かに「キリスト」である「救い主」であるということ覚えさせられるのです。私たちだけでなく、国と時代を超えて、福音を聞いた人たちが、彼女の「したこと」を見聞きするたびに、イエス様こそ「キリスト」である「救い主」であることを知らされるのです。

彼女はおそらくそのことまで考えていなかったと思います。彼女は、ただただイエス様への愛を込めて、「自分にできる」精一杯のこととして「ナルド油」をイエス様の頭に注いだけだと思います。それは、周りの人には無駄なこと、愚かなことに思えました。しかしイエス様は、彼女を用いられたのです。イエス様は「キリスト」である、「救い主」であるということを表す行為として、国や時代を超えて、彼女を用いられたのです。

イエス様への愛を込める時、無駄なことは一つもないのです。そこに愛が込められてい

るなら、周りからどんなに無駄なこと、愚かなことに思えることでも、イエス様は意味を与え、豊かに用いてくださるのです。私たちにとって大切なことは、何をするにもイエス様への愛を込めるということです。私たちがもし、貧しい人たちへの施しをしたとしても、イエス様への愛が込められていなければ、何の意味もないのです。パウロはこう言いました。「たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても、たとえ私の身体を引き渡して誇ることも、愛がなければ、何の役にも立ちません」(Ⅰコリント 13:3)。大切なのは、イエス様への愛を込めるということです。

おわりに

彼女の「したこと」は、当時の人々の約一年分の給料、また三百万円以上の香油を、イエス様の頭に一気に注いで、一瞬で使い切ってしまったことです。それを見ていた人たちにとっては、彼女の「したこと」は、「もったいないこと」「無駄なこと」「愚かなこと」に見えました。

しかしイエス様は、私たちのためにもっと「もったいないこと」「無駄なこと」「愚かなこと」をされたのではないのでしょうか。イエス様は神の子です。その神の子が、罪人のために命を捨てられたのです。神様を愛さず、隣人も愛さず、ただ自分のことだけを考え、神様の御心を痛め続けている罪人の身代わりに、神の子が十字架で命を捨てられたのです。それ自体が、「もったいないこと」「無駄なこと」「愚かなこと」ではないのでしょうか。罪人は自業自得です。神様に従わず、神様の御心を痛めたのですから、滅ぼして捨ててもかまわない存在です。しかしイエス様は、その罪人を赦し、救うために、命を捨てられたのです。神の子が、罪人のために命を捨てる、これほど「もったいなこと」「無駄なこと」「愚かなこと」はないのです。

そこまでしてくださったイエス様に、当時の人々の約一年分の給料、また三百万円以上のものを捧げることは、果たして「もったいないこと」「無駄なこと」「愚かなこと」でしょうか。むしろそれでは全然足りないぐらいではないでしょうか。一生分の給料でも、四百万円でも、五百万円でも足りないのではないのでしょうか。

私たちは、イエス様のために「活動」し、「奉仕」し、「ささげる」ことで、「もったいないこと」「無駄なこと」「愚かなこと」など何一つないのです。私たちの永遠の救いのために、神の子である御自身の命を捧げてくださったのですから、私たちは一生かかっても、どんな高価なささげ物でも十分にお返しすることなどできないのです。

イエス様はそれでも、私たちの「活動」や「奉仕」や「ささげ物」に意味を与え、用いてくださるのです。大切なことは、イエス様の大きな愛に答えて、私たちもイエス様への愛を込めるということです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、神御自身でありながら、罪人の私たちを救うために、人となり、十字架で命

を捨てられました。高価な「ナルド油」よりも比べものにならないほど高価なあなたの命を捧げてくださってありがとうございます。私たちがあなたにするすべてのことは、その意味で何一つ「もったいないこと」「無駄なこと」「愚かなこと」は一つもありません。どんなに大きなことを成し遂げても、どんなに多くのささげ物をして、決して十分なお返しにはなりません。

どうか私たちが、あなたの大きな愛に答えて、あなたへの心からの愛を込めてすべての「奉仕」をすることができますように。どんなに小さな「奉仕」でも、そこにあなたへの愛が込められているなら、あなたは意味を与え、用いてくださいます。

心より感謝して、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。